

高等女学校の研究（第四報）

——高女卒業生のアンケート調査から（二）——

山本 禮子

「高等女学校の研究（第二報）」において、県立高等女学校卒業生対象に実施したアンケート調査について記述した。今回は私立高等女学校および女学校卒業生を対象に調査施行、その結果を前回と比較検討しながら論述することを主眼とする。

一、調査の概要

(一) 調査対象・方法 調査対象校は、学校史を考慮に入れながら、地域的分布、私立校の性格等を勘案して十五校を選定した。その上、調査対象者を前回同様五年おきに三十名をランダムに抽出、郵送法によりアンケートを求めた。

(二) 調査期間 一九八七年三月～五月

(三) 回収状況

実質発送数 一、九五四

有効回答数 六〇〇

回収率 三〇・七一%

(四) 調査内容

アンケートの内容は、原則的には前回のものに準拠し、つぎの二問を追加した。

質問五(2) 上記の女学校を選択した理由をお聞かせください。

質問五(3) あなたの女学校の建学の精神について、ご記憶のことなどありましたらお書きください。
アンケート対象校ならびに学校別・年次別回収状況は表一参照。

二、調査結果

本論文においては、十五校の私立女学校をつぎの四類型にわけて、年次別変容と類型別差異をとらえつつ、県立高女の場合と比較しながら把握する。

第一類型 キリスト教主義の高等女学校

第二類型 キリスト教主義の女学校

第三類型 非キリスト教主義の高等女学校

第四類型 非キリスト教主義の女学校

各学校の類型は表一に併記した。第四類型は回収数が極端に少ないため統計的意味はほとんどない。
卒業年次別・類型別のアンケート回収数はつぎの通りである。

卒業年次別
アンケート回収数

年次	回収数
1910	5
1915	12
1920	42
1925	79
1930	96
1935	114
1940	113
1945	115
計	576

類型別
アンケート回収数

類型	回収数
第一類型	78
第二類型	119
第三類型	371
第四類型	8

表 1 学校別・卒業年次別有効アンケート回答数

類型	私立女学校名(現高校名)	卒業年次	1910 (明43)	1915 (大 4)	1920 (大 9)	1925 (大14)	1930 (昭 5)	1935 (昭10)	1940 (昭15)	1945 (昭20)	計
II	遺愛女学校 (遺愛女子高校)				4	4	5	13	4	3	33
IV	東奥家政女学校 (東奥女子高校)								1	1	2
II	北陸女学校 (北陸高校)				2	8	5	9	7	3	34
IV	和洋女子学院・和洋裁縫女学校 (和洋女子大学附属九段女子高校)						1		3	2	6
III	三輪田高等女学校 (三輪田学園高校)		3	5	8	18	21	24	23	24	126
III	実践高等女学校 (実践女子学園高校)		1		4	9	11	10	7	12	54
III	成城高等女学校 (成城学園高校)						5	14	20	26	65
II	自由学園本科 (自由学園高等科)					1	2	2	3	2	10
I	雙葉高等女学校 (雙葉高校)			3	7	9	4	6	7	7	43
III	跡見女学校 (跡見学園高校)			1	9	5	6	9	5	8	43
III	愛知淑徳高等女学校 (愛知淑徳高校)		1		3	8	13	11	9	8	53
III	樟蔭高等女学校 (樟蔭高校)					8	6	5	5	6	30
I	活水高等女学校 (活水高校)				2		5	2	5	1	15
II	福岡女学校 (福岡女学院高校)			1	1	6	9	8	9	8	42
I	大江高等女学校 (熊本フェイス女学院)			2	2	3	3	1	5	4	20
そ の 他					2	1	6	3	10	2	24
合 計			5	12	44	80	102	117	123	117	600

(一) 生活環境

1 父の職業

私立高等女学校ならびに女学校(以下、私立高女と呼ぶ)の生徒の家庭の職業、すなわち、父親あるいはそれにかわる保護者の職業を表二に示した。全体的に見ると会社員・銀行員が多く二四%、ついで自営商業の一四%で県立高女の場合と順位が逆である。さらに教員が一〇%以上を占めているのが特徴。一方農業の家庭が一九三〇年の五・七%がピークでその後は一%と減少する。私立校に通学させる経済的負担を考えると父親の職業の偏りは当然のこととみられる。時代的に変動の多いものは会社員・銀行員で、一九四〇年代に三割以上に達している。この職種は、第三類型の高女に多い。第一類型では官吏が他の類型より二倍で、第二類型は自営商業が目立つ。学校の立地条件にも左右されるので、職業分布から学校の性格を云々することはできない。

2 母の職業

私立高女生の母親の就業率は、きわめて低く(表三)、県立高女の場合の二〇・八%に対し、七・一%という数値に留まっている。また、職種も人の手を必要とする自営商業および農業に限られている。つまり、多くの母親は「主婦」の座にあって内助の功と子女の養育に専念している姿が浮上してくる。

3 家族構成

① 核家族化

一九二〇年における核家族対大家族の比率は三対二で前回の調査結果と同じであるが、一九三〇年前後で二・四対一、四〇年以降で三対一と核家族の占める割合が多くなっている(表四)。類型別にみると第II類型、すなわちキリスト教主義の女学校の家庭での核家族化が進んでいるが、その理由は今回の調査からは不明である。

② 兄弟の人数・使用人数

一家庭の平均子ども数(表五)は、県立高女の調査結果では四・四人前後であったが、私立高女生の家庭では五人強であり、類型別にみると第I類型が六・一人ともっとも多い。これに比例して使用人数が増加し、四五年でも一・三七人と県立高女の二倍近い数値になっている。中流階級でも上位にある家庭像が描き出される。

表2 父（主たる）職業

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察					1	2.6			1	1.1						
裁判所													1	1.0		
軍人			1	8.3	4	10.5	1	1.5	9	10.2	4	4.0	3	3.1	5	4.7
官吏			1	8.3	4	10.5	12	17.6	10	11.4	8	7.9	11	11.3	5	4.7
市町村長・議員等							2	2.9					1	1.0		
地主			2	16.7	3	7.9	3	4.4	3	3.4	1	1.0			1	0.9
大企業経営者			1	8.3	1	2.6	5	7.4	4	4.5	1	1.0	3	3.1	9	8.5
中小企業経営者					2	5.3	1	1.5	6	6.8	6	5.9	8	8.2	4	3.8
恩給・金利生活者									1	1.1	3	3.0	3	3.1	3	2.8
農・林・漁業					1	2.6	3	4.4	5	5.7	1	1.0	1	1.0	1	0.9
自営商業					7	18.4	10	14.7	14	15.9	17	16.8	6	6.2	20	18.9
自営工業・製造業	1	25.0			3	7.9	2	2.9	2	2.3	10	9.9	4	4.1	4	3.8
医療関係者	1	25.0	1	8.3	4	10.5	2	2.9	6	6.8	3	3.0	10	10.3	5	4.7
教員	1	25.0	1	8.3	2	5.3	9	13.2	9	10.2	13	12.9	9	9.3	9	8.5
神職・住職							1	1.5	2	2.3	4	4.0	1	1.0		
技術者					1	2.6	2	2.9			2	2.0	1	1.0	3	2.8
会社員・銀行員	1	25.0	5	41.7	4	10.5	9	13.2	13	14.8	25	24.8	33	34.0	34	32.1
自由業					1	2.6	6	8.8	3	3.4	3	3.0	2	2.1	3	2.8
工場労働者																
計	4	100.0	12	100.0	38	100.0	68	100.0	88	100.0	101	100.0	97	100.0	106	100.0

表2-2 父（主たる）の職業（類型別）

職業分類	第1類型		第2類型		第3類型		第4類型		合計	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警察			1	1.0	1	0.3			2	0.4
裁判所					1	0.3			1	0.2
軍人	4	5.9	2	1.9	21	6.3			27	5.3
官吏	12	17.6	9	8.6	30	9.0			51	9.9
市町村長・議員等	1	1.5			2	0.6			3	0.6
地主	6	8.8	2	1.9	5	1.5			13	2.5
大企業経営者	3	4.4	3	2.9	18	5.4			24	4.7
中小企業経営者	2	2.9	8	7.6	17	5.1			27	5.3
恩給・金利生活者			2	1.9	7	2.1	1	12.5	10	1.9
農・林・漁業	2	2.9	4	3.8	4	1.2	2	25.0	12	2.3
自営商業	7	10.3	19	18.1	48	14.4			74	14.4
自営工業・製造業	1	1.5	5	4.8	19	5.7	1	12.5	26	5.1
医療関係者	8	11.8	6	5.7	18	5.4			32	6.2
教員	7	10.3	14	13.3	30	9.0	2	25.0	53	10.3
神職・住職	2	2.9	4	3.8	2	0.6			8	1.6
技術者					9	2.7			9	1.8
会社員・銀行員	12	17.6	22	21.0	88	26.4	2	25.0	124	24.1
自由業	1	1.5	4	3.8	13	3.9			18	3.5
工場労働者										
計	68	100.0	105	100.0	333	100.0	8	100.0	514	100.0

表 3 母の職業（年次別）

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
中小企業経営									1	8.3	3	25.0				
恩給・金利生活者							1	25.0	1	8.3	1	8.3	1	16.7		
農・林・漁業							2	50.0					2	33.3	1	20.0
自営商業									5	41.7	1	8.3	2	33.3	3	60.0
自営工業・製造業									1	8.3	1	8.3				
医療関係 { 医師 看護婦 助産婦 薬剤師																
教 員 { 教 員 和洋裁教師 茶華道教師							1	25.0			3	25.0				
技 術 者 { 技 術 者 和洋裁教師 茶華道教師									2	16.7	1	8.3				
会社員・銀行員									1	8.3	1	8.3				
自由業					2	100.0			1	8.3	1	8.3				
和洋裁仕立													1	16.7		
店 員															1	20.0
計	0		0		2	100.0	4	100.0	12	100.0	12	100.0	6	100.0	5	100.0

表 3-2 母の職業（類型別）

職業分類	第1類型		第2類型		第3類型		第4類型		合 計	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
中小企業経営			21	15.4	2	11.1			4	9.8
恩給・金利生活者	1	12.5			3	16.7			4	9.8
農・林・漁業	3	37.5					2	100.0	5	12.2
自営商業	1	12.5	3	23.1	7	38.9			11	26.8
自営工業・製造業					2	11.1			2	4.9
医療関係 { 医師 看護婦 助産婦 薬剤師										
教 員 { 教 員 和洋裁教師 茶華道教師			3	23.1	1	5.6			4	9.8
技 術 者 { 技 術 者 和洋裁教師 茶華道教師	1	12.5	2	15.4					3	7.3
会社員・銀行員			2	15.4					2	4.9
自由業	2	25.0	1	7.7	1	5.6			4	9.8
和洋裁仕立										
店 員					2	11.1			2	4.9
計	8	100.0	13	100.0	18	100.0	2	100.0	41	100.0

表4 核家族化

	核 家 族		大 家 族	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	60.00	2	40.00
1915年	10	83.33	2	16.67
1920年	25	59.52	17	40.48
1925年	54	68.35	24	30.38
1930年	68	70.83	28	29.17
1935年	79	69.30	32	28.07
1940年	85	75.22	28	24.78
1945年	89	77.39	26	22.61
合 計	413	71.70	159	27.60
第一類型	56	71.79	22	28.21
第二類型	91	76.47	26	21.85
第三類型	264	71.16	105	28.30
第四類型	2	25.00	6	75.00

表5 兄弟・使用人平均人数

	子供数	使用人数
1910年	7.20	2.80
1915年	5.92	2.17
1920年	6.62	1.98
1925年	5.82	1.70
1930年	5.05	1.54
1935年	5.25	1.78
1940年	5.07	1.49
1945年	5.37	1.37
計	5.38	1.63
第一類型	6.13	1.81
第二類型	5.34	1.20
第三類型	5.25	1.75
第四類型	5.00	0.88

(二) 高女生の生活

1 進学の意味

私立高女への進学に際し、八割以上のものが「進学が当然」とうけとめている(表六)。私立であるための授業料負担から「親の反対を押して」進学するものは県立高女より少く、「親のすすめ」による者が三割前後を占めている。

自由記述を見ると、カトリック系の学校選択では、父親のフランス勤務、家族の信仰、小学校がカトリック系であったこと、さらに本人がカトリックの信者であるといった鮮明な理由が目立つ。この傾向はプロテスタント系の学校選択理由でも言えることである。母親が『婦人の友』の読者であったことから子女を進学させるといった事例も数例あり、また、五人姉妹が同一学校に計二十五年通学したという例、母娘で同一校に通学するようこびを綴るなど私立校ならではの理由も特色がある。一方、高等科を出て、高女三年に編入でき、かつ、寄宿舎がある学校を選ぶという県立高女では受け入れられない条件を許可するので入学したという記述もある。

第三類型では、創立者に傾倒して選定する傾向が強く、女子教育に評判の良い私立校に入学を希望している。もっとも小学校からの一貫教育で当然進学した成城の高女生も特色のある進学動機といえよう。さらに絵を学びたい、運動がしたい、裁縫を学びたいと私立

表6 進学の意味

	進学が当然		反対を押して		親のすすめ		教師のすすめ		兄弟と姉妹のすすめ		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	80.00	1	20.00								
1915年	9	75.00			3	25.00					1	8.33
1920年	30	71.43	4	9.52	12	28.57	2	4.76	4	9.52	2	4.76
1925年	63	79.75	1	1.27	28	35.44	7	8.86	6	7.59	3	3.80
1930年	82	85.42	2	2.08	25	26.04	4	4.17	8	8.33	5	5.21
1935年	89	78.07			44	38.60	5	4.39	4	3.51	8	7.02
1940年	94	83.19	2	1.77	32	28.32	7	6.19	1	0.88	2	1.77
1945年	99	86.09			31	26.96	8	6.96	7	6.09	1	0.87
合計	470	81.60	10	1.74	175	30.38	33	5.73	30	5.21	22	3.82
第一類型	60	76.92	3	3.85	22	28.21	5	6.41	5	6.41	2	2.56
第二類型	92	77.31	2	1.68	37	31.09	4	3.36	11	9.24	7	5.88
第三類型	311	83.83	4	1.08	114	30.73	23	6.20	13	3.50	13	3.50
第四類型	7	87.50	1	12.50	2	25.00	1	12.50	1	12.50		

校の特色にひかれる場合や、卒業後小学校教師になる資格がとれるためといった具体的な志望による女学校選定もある。

2 高等女学校・女学校の授業風景

① 修身・国語・地歴

修身科の担当教師は六割が校長であり、第三類型は六八%と他の第一、第二類型の三七、四一%を大きくひきはなしている(表七)。校長による講話は「修身といった堅苦しさはなくユーモアをまじえ、とても楽しく感じられた」との感想文に代表されるように、建学の精神を通して良妻賢母の女子教育の講話を聞く時間であった。第一、第二類型のキリスト教主義の学校では、修身という教科がない場合が多く、聖書の話を聞く時間であり、「カトリック精神に基づく修身教育で有意義であった」と懐古している。しかし、「昭和十八年ごろから教育勅語、青少年ニ賜リタル勅語、軍人勅語の暗記」があつたと、キリスト教主義学校の時局に迎合せざるをえなかった様子として記載している人もある。そのような状況の中で、自由学園、成城高女は、教科書に準拠せずこの教科の授業を実施している。「羽仁西先生懇談の時間といって、生徒は日頃思っていることを何でもありのままにお話する。……先生とご一緒に読んだ本。『少女』『何處へ行く』『青い鳥』『人形の家』と記している。「物語を通じて、色々と学んだ」り、「人物評伝のような話」、時にはフリー

表 7 修身・国語・地歴

	修 身 担 当						歴 史 ・ 地 理									
	校 長		専 科		担 任		暗 記		地図作成		見 学		史跡調査		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	80.0	1	20.00	1	20.00			2	40.00	1	20.00	1	20.00		
1915年	9	75.00	2	16.67			5	41.67			1	8.33	1	8.33		
1920年	26	61.90	13	30.95	14	33.33	15	35.71	9	21.43	5	11.90	4	9.52	1	2.38
1925年	45	56.97	15	18.99	25	31.65	48	60.76	16	20.25	16	20.25	7	8.86		
1930年	51	53.13	29	30.21	18	18.75	61	63.54	20	20.83	17	17.71	7	7.29	2	2.08
1935年	63	55.26	32	28.07	17	14.91	82	71.93	31	27.19	22	19.30	4	3.51	2	1.75
1940年	61	53.98	37	32.74	19	16.81	65	57.52	31	27.43	22	19.47	9	7.96	3	2.65
1945年	75	65.22	25	21.74	16	13.91	70	60.87	47	40.87	4	3.48	2	1.74	3	2.61
合 計	334	57.99	154	26.74	110	19.10	346	60.07	156	27.08	88	15.28	35	6.08	11	1.91
第一類型	29	37.18	23	29.49	21	26.92	40	58.97	20	25.64	4	5.13	5	6.41	2	2.56
第二類型	49	41.17	29	24.37	30	25.21	65	54.62	29	24.36	18	15.13	5	4.20	2	1.68
第三類型	253	68.19	100	26.95	56	15.09	233	62.80	106	28.57	64	17.25	25	6.74	6	1.62
第四類型	3	37.50	2	25.00	3	37.50	2	25.00	1	12.50	2	25.00			1	12.50

	古 文		漢 文		かきとり		作 文		読 書		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	2	40.00	3	60.00	3	60.00	5	100.00	3	60.00	1	20.00
1915年			2	16.67	3	25.00	5	41.67	5	41.67		
1920年	17	40.48	12	28.57	20	47.62	23	54.76	26	61.90		
1925年	30	34.97	19	24.05	42	53.16	50	63.29	41	51.90	6	7.59
1930年	33	34.38	22	22.92	33	34.38	52	54.17	46	47.92	5	5.21
1935年	63	55.26	32	28.07	66	57.89	74	64.04	53	46.49	2	1.75
1940年	63	55.75	40	35.40	48	42.48	73	64.60	51	45.13	11	9.73
1945年	45	39.13	31	26.96	41	35.65	62	53.91	52	45.22	11	9.57
合 計	253	43.92	161	27.95	256	44.44	344	59.72	277	48.09	36	6.25
第一類型	29	37.18	10	12.82	31	39.74	53	67.95	44	56.41	6	7.69
第二類型	42	35.29	10	8.40	59	49.58	75	63.03	68	57.14	2	1.68
第三類型	179	48.25	139	37.47	163	43.94	213	57.41	161	43.40	28	7.55
第四類型	3	37.50	2	25.00	3	37.50	3	37.50	4	50.00		

トーキングの時間にも充当されている。また、学校によっては担当教師によつて特徴をもたせている。「一、二年はお年を召した女の先生で、主に儒教を中心にしての講義。教科書中心。三、四年の時は西洋文学『人形の家』『罪と罰』等を中心にして女の道、新しい女の在り方、考え方等」を学んだと記している。県立高女に比し、相当自由にこの教科を展開していたと見ることが出来る。

国語の授業で印象に残っている筆頭が作文であり、ついで読書、かきとりの順である。ダルトンプランを導入している成城高女は自学自習で学習を進め、国語の教科書を使用しない自由学園は、内外の名作を読むこと、竹取物語、平家物語などの古文をコマ切れでなく、通読するといった指導をとっている。

実践高女では校長自身が教壇に立ち生徒達に感銘を与えている。「下田歌子先生を神様と思っておりました。老子や源氏物語の講義の美しさは心に残ります」(実践高女 一九二五年卒業生) 下田は短歌の添削指導も行っている。

地歴教育は、統計で見る限りでは、暗記教育との印象が強い。しかし、「クレオパトラの話に二ヶ月かかるというのんびりした授業もあり」と評価する実践高女の卒業生もいるし、「地理は張出し勉強と言つて、一週間まとめて東大の先生より、びっちり世界地理を教えて頂き大変面白かった。」と評価する自由学園の生徒もいるが、全般的には不振であつたと推測できる。

② 外国語

この教科に特質があつたとする私立高女は多く、全員必修が九割(表八)を超えている。ただ、四五年は必修が五〇%と低下した。授業内容は書き取りが六五%で筆頭であるが、会話の四六%は県立高女の二倍、とくに第一、第二類型のキリスト教主義の女学校では六五%前後と高い数値になっている。また劇や歌による語学学習も県立高女を大幅に上回っている。キリスト教主義の学校にとゞまらず、外人教師を雇用して指導にあたせた学校は少なくなかった。実践高女には英語教師が日本人二人、米・英婦人各一名ずつという記載がある。日本語の使用が禁じられた会話の時間、徹底した発音の指導、英語による日記とその添削等も楽しい思い出として綴られている。しかし、戦時色が濃くなる一九四〇年代になるとこの履修もままならず必修から選択、さらに中止の方向に発展していくのであつた。

「英語は、戦争の影響であまり出来なくなつた。会話の授業はなかつたが、やさしいお話しを紙芝居にしたり、アメリカ人の先生と白雪姫の劇を全校にみせた。聖書・英詩・新聞を読む。時々全校で、English speaking dayがあり、その時は出来るだけ皆が英語を

表 8 英 語

	英 語 の 履 修								英 語 の 授 業			
	希望者選択		全員必修		低学年必修 高学年選択		な し		うけた		うけない	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	4	80.00					3	60.00		
1915年			12	100.00					12	100.00		
1920年			41	97.62					40	95.24		
1925年	2	2.53	73	92.41	2	2.53			76	96.20		
1930年			91	94.79	3	3.13			95	98.96		
1935年	1	0.88	113	99.12					112	98.25	1	0.88
1940年	4	3.54	103	91.15	6	5.31			109	96.46	2	1.77
1945年	16	13.91	58	50.43	41	35.65	3	2.61	105	91.30	7	6.09
合 計	24	4.17	495	85.94	52	9.03	3	0.52	552	95.83	10	1.74
第一類型	3	3.85	68	87.18	6	7.69	1	1.28	75	96.15	3	3.85
第二類型	1	0.84	113	94.96	3	2.52			117	98.32		
第三類型	18	4.85	311	83.83	43	11.59			356	95.96	3	0.81
第四類型	2	25.00	3	37.50			2	25.00	4	50.00	4	50.00

	授 業 内 容											
	暗 唱		歌		劇		会 話		書きとり		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	2	40.00	1	20.00	2	40.00	2	40.00		
1915年	3	25.00	3	25.00	1	8.33	6	50.00	6	50.00	1	8.33
1920年	21	50.00	12	28.57	7	16.67	18	42.86	21	50.00	7	16.67
1925年	26	32.91	18	22.78	7	8.86	32	40.51	49	62.03	12	15.19
1930年	44	45.83	27	28.13	24	25.00	53	55.21	64	66.67	18	18.75
1935年	62	54.39	40	35.09	31	27.19	65	57.02	81	71.05	13	11.40
1940年	57	50.44	24	21.24	14	12.39	57	50.44	78	69.03	24	21.24
1945年	59	51.30	21	18.26	11	9.57	34	29.57	71	61.74	21	18.26
合 計	273	47.40	147	25.52	96	16.67	267	46.35	372	64.58	96	16.67
第一類型	38	48.72	19	24.36	17	21.79	49	62.82	47	60.26	17	21.79
第二類型	57	47.90	54	45.38	35	29.41	84	70.59	88	73.95	14	11.76
第三類型	178	47.98	74	19.95	44	11.86	133	35.85	235	63.34	65	17.52
第四類型							1	12.50	2	25.00		

使うことになっていた」

これは四五年自由学園卒業生の自由記述である。双葉高女も語学教育に熱意を示し、A B二組にわけ、当初は附属小学校からのものがA組になったが、後にテストの成績によりBからAに移行させるという能力別編成を実施している。この英語と平行して、希望者にはフランス語を選択させ、指導している。

③ 理数科

数学(表九)については、難しかったが三五%、おもしろかったが三六%、興味がもてなかったが二二%で、県立高女とほぼ傾向が似ている。数学をダルトンプランで実施している成城高女では、テストも先生と一対一でなされている。一方、自由学園では、羽仁もと子が直接指導にあたっている。「組中で先生と一問一答して考え合っていくと、次々と訳が分って、どんな問題でも解けていく面白さを知った。雛形を作る考えもあった。」とその楽しさにふれている。

理科(表一〇)では講義が八一%と第一位で、実験は第三類型で八〇%近くあるが、採集、標本づくり等で県立高女の数値を大きく下廻っている。しかし、つぎの記述は理科の学習を通しての驚きと喜びを表現している文章である。

「自然環境に恵まれていたので、よく胸乱を下げて周辺に採集に出掛けた。また、実験はグループごとに写真の現像、ラジオの組み立て、香水作り、等々、失敗を重ねながら取り組んだ」成城高女 一九三二年卒業生

「ご飯の腐敗の研究をし、徹夜で実験を続けた。楽しくぞくぞくするような気持ちだった。この時有機化学の基礎を東大の先生に講義して頂いた」自由学園 一九四五年卒業生

④ 芸術・体育

音楽(表一一)は合唱が筆頭で八四%。一九二〇年前後より四〇年までがさかんである。キリスト教主義の学校では賛美歌の合唱やハレルヤコーラス等がさかんである。成城高女のように成城中学との混声合唱も生徒の興味を喚起している。これがつぎのような行事への参加につながるのであった。

「三年になると混声合唱団に参加し、卒業生と共に大曲に取り組んだ。マタイ受難曲を日比谷のステージで現在のNHKフィルと共に演じ、終演と同時に数人は戦場に向かい、再び帰らぬ人もあった。若い日の最初の悲しみとして今も心に残る」成城高女 一九四五

表 9 数 学

	難しかった		易しかった		おもしろかった		興味もてない		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	1	20.00	3	60.00	2	40.00	1	20.00
1915年	3	25.00	3	25.00	6	50.00	1	8.33		
1920年	12	28.57	3	7.14	18	42.86	3	7.14	1	2.38
1925年	22	27.85	8	10.13	24	30.38	20	25.32	4	4.17
1930年	30	31.25	8	8.33	37	38.54	19	19.79	4	5.06
1935年	54	47.37	10	8.77	45	39.47	29	25.44	2	1.75
1940年	34	30.09	8	7.08	30	26.55	34	30.09	11	9.73
1945年	44	38.26	14	12.17	45	39.13	21	18.26	2	1.74
合 計	200	34.72	55	9.55	208	36.11	129	22.40	25	4.34
第一類型	29	37.18	7	8.97	32	41.03	23	29.49	2	2.56
第二類型	42	35.29	9	7.50	40	33.61	29	24.37	2	1.68
第三類型	126	33.96	39	10.51	136	36.66	75	20.22	21	5.66
第四類型	3	37.50					2	25.00		

表10 理 科

	講 義		実 験		観 察		採 集		標本づくり		飼 育		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	2	40.00										
1915年	8	66.67	4	33.33	2	16.67	2	16.67	2	16.67				
1920年	24	57.14	21	50.00	13	30.95	5	11.90	4	9.52			1	2.38
1925年	64	81.01	54	68.35	32	40.51	9	11.39	9	11.39	2	2.53		
1930年	73	76.04	64	66.67	34	35.42	14	14.58	10	10.42	2	2.08	1	1.04
1935年	106	92.98	97	85.09	69	60.53	33	28.95	16	14.04	5	4.39		
1940年	92	81.42	89	78.76	52	46.02	24	21.24	18	15.93	2	1.77	1	0.88
1945年	99	86.09	92	80.00	48	41.74	17	14.78	14	12.17	4	3.48	1	0.87
合 計	467	81.08	423	73.44	250	43.40	104	18.06	73	12.67	15	2.60	4	0.69
第一類型	64	82.05	52	66.67	30	38.46	11	14.10	11	14.10	1	1.28		
第二類型	89	74.79	75	63.03	53	44.54	31	26.05	23	19.33	6	5.04		
第三類型	310	83.56	292	78.71	166	44.74	62	16.71	39	10.51	8	2.16	4	1.08
第四類型	4	50.00	4	50.00	1	12.50								

年卒業生

多くの学校でコリリューブゲンによる指導がなされ、原語の歌詞による歌唱および作曲指導も実施されている。さらに器楽指導も希望者に対する個別指導の形態をとっているところが多い。このように概して洋楽中心の音楽教育の中で「正課として週一回謡曲を五年間」学ぶ三輪田高女はユニークである。

図画(表一二)は、静物・風景・人物の順で写生が多く、同時に模写の占める時間も多かったようだ。ただ第二類型は他の類型より、写生・自由画に重点がおかれ、模写が少ない。

日本画を教える学校あり、油絵に重点をおく学校ありで、指導に多様性がみられる教科である。跡見高女では、校長の花溪自らが日本画の基礎的指導にあたっている。習字も「跡見流」を花溪および李子が直接指導するといった熱の入れようで、高度な芸術教育を志向していたことが窺われる。一方、成城高女は美術展には必ず見学に連れて行くという指導法をとっている。

体操(表一三)の筆頭はダンスで平均五七％であるが、テニス・バレーボールを除いて、どれも県立高女の数値を下廻っている。薙刀は県立で三五％、四五年で七七％であるのに対し、私立高女では一四％、三一％と低率である。一九三五年卒の実践高女の生徒は「薙刀は課外授業。習いたい人が月謝を出し特別の時間に授業をうけた」と記している。学校によっては必修で履修させているかもしれないが、私立高女の生徒にはもっと楽しい運動があったことが自由記述でわかる。

「ホッケー、乗馬、デンマーク体操、弓道。金曜日の午後は、体育デーと称し全員、各自好みのスポーツに参加、終了後は当番の作ったおやつに空腹を満たした。私は毎回乗馬を楽しみ、晴天の日はたいいてい遠乗りに、また、馬場馬術にと青春を楽しんだ」成城高女 一九三二年卒業生

「デンマーク体操の外人の先生はなかなか厳しく、助木を使ったり、床の上の体操を指導して下さったので、体操の翌日はお腹の筋肉が痛かったです」成城高女 一九三五年卒業生

スキーを楽しんだ学校、羽根つきをやった学校、狭い運動場を工夫して利用したり、校外を活用したりしている。

⑤ 家事・裁縫

家事(表一四)についての筆頭が割烹の七八％、染色・栄養に関する指導は一九三〇年前後からより充実していったと推測できる。

表11 音 楽

	唱 歌		合 唱		ピアノ		バイオリン		オルガン		器 楽		楽 典		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	5	100.00	2	40.00												
1915年	11	91.67	9	75.00	2	16.67			2	16.67						
1920年	27	64.29	26	61.90	6	14.29	1	2.38	3	7.14	1	2.38	7	16.67		
1925年	58	73.42	61	77.22	11	13.92	1	1.27	8	10.13	5	6.33	16	20.25	1	1.27
1930年	63	65.63	76	79.17	17	17.71	8	8.33	4	4.17	4	4.17	25	26.04	1	1.04
1935年	94	82.46	109	95.61	9	7.89	2	1.75	3	2.63	8	7.02	48	42.11	5	4.39
1940年	80	70.80	101	89.38	5	4.42			2	1.77	3	2.65	49	43.36	1	0.88
1945年	77	66.96	101	87.83	13	11.30	1	0.87	2	1.74	8	6.96	46	40.00	5	4.35
合 計	415	72.05	485	84.20	63	10.94	13	2.26	24	4.17	29	5.03	191	33.16	13	2.26
第一類型	56	71.79	69	88.46	4	5.13	2	2.56	4	5.13	3	3.85	23	29.49	5	6.41
第二類型	72	60.50	101	84.87	32	26.89	2	1.68	16	13.45	20	16.81	39	32.77	5	4.20
第三類型	281	75.74	310	83.56	27	7.28	9	2.43	4	1.08	6	1.62	129	34.77	3	0.81
第四類型	6	75.00	5	62.50												

自由記述を引用して、各学校の指導の独自性をとらえてみよう。

「洋食の食べ方、作法の仕方は宣教師館に数名ずつ呼ばれて、先生の手作りの食事をして教えられた」北陸女学校 一九三〇年卒業生

「昼食は毎日生徒が全校の人の分を作って食堂で先生も生徒も一緒にいただきます」自由学園 一九二五年卒業生

「聖路加病院まで行って実地に看護の勉強をした。幼児の勉強では、実際に幼児生活団を手伝ったり、託児所の仕事をしたりしながら勉強した。農家の改造については今和次郎氏と勉強した。週一回全校の昼食を作る。その栄養計算をすることが重要な勉強でした」自由学園 一九四五年卒業生

「割烹は和・洋食それぞれに一流の料理専門家が来校して実習を受けました。家事では障子張り、こまかい事では下駄の緒のすげ替え等、家庭的な雑用をする。また、結婚、婚姻、出産、育児、看護、家庭経済等の中に、女中、乳母についての様々な項目がありました。特に乳母について等、時代感があります」愛知淑徳高女 一九三九年卒業生

「住居で、家の間取り図を各自工夫し、未来の我が家を想像遅しく設計して楽しんだ。割烹は当番制で、代わる代わる昼食の給食作りのお手伝いをしたことが印象深い」成城高女 一九三二年卒業生

表12 図 画

	模 写		自由画		静物画		人物画		風景画	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	80.00	1	20.00					1	20.00
1915年	7	8.33	2	16.67	1	8.33	1	8.33	3	25.00
1920年	27	64.29	7	16.67	9	21.43	3	7.14	6	14.29
1925年	52	65.82	20	25.32	22	27.85	11	13.92	20	25.32
1930年	46	47.92	42	43.75	35	36.46	24	25.00	30	31.25
1935年	63	55.26	49	42.98	46	40.35	15	13.16	38	33.33
1940年	50	44.25	47	41.59	43	38.05	16	14.16	32	28.32
1945年	63	54.78	57	49.57	48	41.74	26	22.61	32	27.83
合 計	312	54.17	225	39.06	204	35.42	96	16.67	162	28.13
第一類型	50	64.10	25	32.05	23	29.49	3	7.69	17	21.79
第二類型	41	34.45	53	44.54	45	37.82	27	22.69	46	38.66
第三類型	220	59.30	146	39.35	136	36.66	63	16.98	98	26.42
第四類型	1	12.50	1	12.50					1	12.50

	写 生		彫 刻		粘 土		版 画		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	2	40.00								
1915年	3	25.00							1	8.33
1920年	11	26.19					1	2.38	2	4.76
1925年	18	22.78			3	3.80			7	8.86
1930年	27	28.13	1	1.04	3	3.13	1	1.04	11	11.46
1935年	37	32.46	4	3.51	6	5.26	7	6.14	7	6.14
1940年	38	33.63	3	2.65	3	2.65	5	4.42	5	4.42
1945年	42	36.52			4	3.48	4	3.48	11	9.57
合 計	178	30.90	8	1.39	19	3.30	18	3.13	44	7.64
第一類型	26	33.33			3	3.85	3	3.85	7	8.97
第二類型	38	31.93	3	2.52	4	3.36	5	4.20	3	2.52
第三類型	113	30.46	5	1.35	12	3.23	10	2.70	34	9.16
第四類型	1	12.50								

表13 体 操

	ダンス		テニス		バレー ボール		卓 球		バスケット ボ ール		球 技		な ぎ な た	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	1	20.00	1	20.00	1	20.00					1	20.00
1915年	7	58.33	8	66.67	1	8.33	1	8.33	1	8.33			1	8.33
1920年	17	40.48	11	26.19	3	7.14	8	19.05	7	16.67	5	11.90	3	7.14
1925年	34	43.04	30	37.97	12	15.19	19	24.05	20	25.32	8	10.13	9	11.39
1930年	46	47.92	20	20.83	27	28.13	23	23.96	36	37.50	11	11.46	10	10.42
1935年	77	67.54	23	20.18	52	45.61	32	28.07	51	44.74	14	12.28	8	7.02
1940年	72	63.72	17	15.04	44	38.94	25	22.12	47	41.59	18	15.93	12	10.62
1945年	72	62.61	16	13.91	46	40.00	17	14.78	30	26.09	21	18.26	36	31.30
合 計	326	56.60	126	21.88	186	32.29	126	21.88	192	33.33	77	13.37	80	13.89
第一類型	53	67.95	14	17.95	33	42.31	26	33.33	32	41.03	13	16.67	12	15.38
第二類型	67	56.30	37	31.09	46	38.66	34	28.57	61	51.26	14	11.76	16	13.45
第三類型	205	55.26	75	20.22	105	28.30	66	17.79	98	26.42	50	13.48	51	13.75
第四類型	1	12.50			2	25.00			1	12.50			1	12.50

	肋 木		平均台		とび箱		器械体操		陸上競技		水 泳		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00	2	40.00										
1915年	2	16.67	1	8.33					1	8.33			2	16.67
1920年	5	11.90	9	21.43	2	4.76	3	7.14	2	4.76	1	2.38	5	11.90
1925年	25	31.65	28	35.44	27	34.18	11	13.92	5	6.33	8	10.13	3	3.80
1930年	21	21.88	26	27.08	23	23.96	21	21.88	10	10.42	10	10.42	7	7.29
1935年	25	21.93	30	26.32	31	27.19	25	21.93	11	9.65	17	14.91	13	11.40
1940年	23	20.35	32	28.32	38	33.63	21	18.58	7	6.19	15	13.27	15	13.27
1945年	24	20.87	27	23.48	37	32.17	32	27.83	23	20.00	33	28.70	14	12.17
合 計	126	21.88	155	26.91	158	27.43	113	19.62	59	10.24	84	14.58	59	10.24
第一類型	14	17.95	23	29.49	19	24.36	15	19.23	10	12.82	2	2.56	7	8.97
第二類型	31	26.05	37	31.09	38	31.93	23	19.33	9	7.56	21	17.65	8	6.72
第三類型	81	21.83	95	25.61	101	27.22	75	20.22	39	10.51	61	16.44	44	11.86
第四類型									1	12.50				

表14 家 事

	衛生看護		家計簿		洗 濯		染 色		割 烹		栄 養		住 居		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年			2	40.00			1	20.00	3	60.00	2	40.00	1	20.00		
1915年	2	16.67	3	25.00			2	16.67	8	66.67	2	16.67	1	8.33	1	8.33
1920年	14	33.33	11	26.19	14	33.33	10	23.81	28	66.67	13	30.95	9	21.43	2	4.76
1925年	26	32.91	13	16.46	26	32.91	37	46.84	64	81.01	16	20.25	15	18.99	2	2.53
1930年	31	32.29	14	14.58	27	28.13	49	51.04	79	82.29	30	31.25	18	18.75	4	4.17
1935年	43	37.72	19	16.67	39	34.21	63	55.26	93	81.58	48	42.11	24	21.05	4	3.51
1940年	44	38.94	24	21.24	47	41.59	61	53.98	89	78.76	58	51.33	21	18.58	2	1.77
1945年	43	37.39	3	2.61	31	26.96	40	34.78	85	73.91	49	42.61	17	14.78	6	5.22
合 計	203	35.24	89	15.45	184	31.94	263	45.66	449	77.95	218	37.85	106	18.40	21	3.65
第一類型	26	33.33	13	16.67	11	14.10	22	28.21	59	75.64	25	32.05	11	14.10	3	3.85
第二類型	43	36.13	13	10.92	34	28.57	43	36.13	96	80.67	41	34.45	17	14.29	7	5.88
第三類型	130	35.04	60	16.17	133	35.85	194	52.29	288	77.63	149	40.16	76	20.49	10	2.70
第四類型	4	50.00	3	37.50	6	75.00	4	50.00	6	75.00	3	37.50	2	25.00	1	12.50

和洋女子大学紀要 第二十九集(文系編)

表15 裁 縫

	和 裁		洋 裁		ミシン縫い		手 芸		編 物		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	80.00					2	40.00	2	40.00	1	20.00
1915年	10	83.33	3	25.00	5	41.67	2	16.67	4	33.33	1	8.33
1920年	36	85.71	8	19.05	15	35.71	13	30.95	10	23.81	3	7.14
1925年	74	93.67	33	41.77	45	56.96	29	36.71	29	36.71	2	2.53
1930年	88	91.67	57	59.38	62	64.58	32	33.33	29	30.21	7	7.29
1935年	102	89.47	89	78.07	85	74.56	66	57.89	47	41.23	1	0.88
1940年	108	95.58	99	87.61	84	74.34	54	47.79	43	38.05	2	1.77
1945年	114	99.13	89	77.39	82	71.30	41	35.65	38	33.04	2	1.74
合 計	536	93.06	378	65.63	378	65.63	239	41.49	202	35.07	19	3.30
第一類型	71	91.03	46	58.97	45	57.69	21	26.92	8	10.26		
第二類型	111	93.28	84	70.59	82	68.91	72	60.50	40	33.61	2	1.68
第三類型	346	93.26	242	65.23	246	66.31	141	38.01	149	40.16	17	4.58
第四類型	8	100.00	6	75.00	5	62.50	5	62.50	5	62.50		

裁縫の中の和裁・洋裁は県立高女とほぼ同率の九三%、六六%である(表一五)。この教科は学校による独自の指導はあまりうかがわれない。どの学校も多かれ少なかれ女子にとって必要な技術教育として推進している。運針を徹底的にやったこと、教材の持ち帰りが禁止されたことなどは多くの自由記述の中でみられる感想である。校服を自作した喜び、モンペを作り、自分で着てファッションショーをしたこと、衣料切符制で材料の調達に苦労したこと、更生品を製作したこと等時代を反映している記述も散見できる。

3 学校行事

統計処理のできる修学旅行の日数を見ると(表一六)、一九二〇年頃は一泊二日もしくは二泊三日が大半であるが、一九三〇年前後になると徐々に日数が延長し、三泊四日から一週間をかけて出掛けるといったひらきがあり、学校によるこの行事に対する取り組みの違いを感じさせられる。観光をかねて名所旧跡を訪ねるといった行程を多くとる中で、福岡女学校のように「長崎の活水女学校に一泊旅行をし、姉妹校の暖かさを満喫」するようなプランも実施されている。また、北陸女学校では、一九三〇年頃の修学旅行で「校長自身引率され、行動に注意しながら、少女歌劇など普段田舎の少女が行かぬ場所を見学させ、夢を育てて下さった」と感想を記するような企画もあった。

行事の中で重視される運動会は、「残念なことに私共の時代まで行いませんでした。」と述べる三五年卒の跡見高女の場合や、運動会はなかったが、市の体育大会への参加、クラス対抗のバレーボール、バザーの日に行くダンス等で代替している活水女学校や樟蔭高女がある。また運動会の時「男子は幼児といえども校内に入れませんでした。」と述べる実践高女の場合もある。しかし、多くの学校では他の場所を借りる学校もあったようだが楽しい行事として想い出の一頁に残している。

「五月十七日は立派なバザーもあって、運動会も手作りの、白いテニス服のようなユニホームを入学して裁縫の時間に作り、お揃いで有名な松坂屋バンドで行進して始まる。当時はこんな有名なバンドを使うのはわが校のみでした」愛知淑徳高女 一九三一年卒業生

「スポーツが盛んな学校でしたから行進が良く揃ってきれいでした」愛知淑徳高女 一九四〇年卒業生

「運動会、小学校から高校まで緑・青・橙・黄と四色の縦割に分かれ、リレーをしたりして全学園が一つになり楽しかった。森の食堂も思い出される」成城高女 一九四〇年卒業生

表16 修学旅行の日数

	日 帰 り		1泊2日		2泊3日		3泊4日		4泊5日		5泊6日		1 週 間		1週間以上		中止・なし	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年			3	60.00	1	20.00												
1915年			3	25.00	4	33.33											1	8.33
1920年	5	11.90	3	7.14	9	21.43	8	19.05					1	2.38			5	11.90
1925年	8	10.13	1	1.27	9	11.39	14	17.72	8	10.13	10	12.66	8	10.13			5	6.33
1930年			6	6.25	13	13.54	15	15.63	8	8.33	15	15.63	14	14.58	4	4.17	7	7.29
1935年					10	8.77	24	21.05	14	12.28	17	14.91	19	16.67	5	4.39	6	5.26
1940年					6	5.31	21	18.58	12	10.62	24	21.24	15	13.27	13	11.50	8	7.08
1945年			7	6.09	3	2.61	1	0.87									72	62.61
合 計	13	2.26	23	3.99	55	9.55	83	14.41	42	7.29	66	11.46	57	9.90	22	3.82	104	18.06
第一類型	13	16.67	6	7.69	14	17.95	6	7.69	3	3.85	8	10.26	3	3.85			14	17.95
第二類型			1	0.84	7	5.88	16	13.45	12	10.08	16	13.45	11	9.24	6	5.04	24	20.17
第三類型			16	4.31	33	8.89	59	15.90	27	7.28	41	11.05	43	11.59	16	4.31	64	17.25
第四類型					1	12.50	2	25.00			1	12.50					2	25.00

表17 家庭学習の時間

	1 時間		2 時間		3 時間		4 時間		5 時間		それ以上	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年												
1915年	2	16.67	1	8.33	1	8.33						
1920年	2	4.76	4	9.52	4	9.52						
1925年	1	1.27	18	22.78	7	8.86	3	3.80	1	1.27		
1930年	14	14.58	15	15.63	8	8.33						
1935年	15	13.16	27	23.68	9	7.89	3	2.63	2	1.75		
1940年	17	15.04	27	23.89	11	9.73	1	0.88	2	1.77		
1945年	14	12.17	21	18.26	7	6.09	4	3.48	1	0.87		
合 計	65	11.28	113	19.62	47	8.16	11	1.91	6	1.04		
第一類型	5	6.41	10	12.82	3	3.85	3	3.85	1	1.28		
第二類型	11	9.24	20	16.81	8	6.72	1	0.84	2	1.68		
第三類型	48	12.94	83	22.37	35	9.43	7	1.89	3	0.81		
第四類型	1	12.50			1	12.50						

全学園行事として行う学校がある一方、東京・横浜・田園調布の雙葉高女と光塩高女四校合同で運動会を行うカトリック系の学校もあった。プロテスタント系の学校では、三校競技と称して、福岡女学校、活水女学校、梅光女学校の間で、バスケットやバレーやテニスの試合を実施している。同系列の私立校間の交流がさかんであったことを裏書きしている。

その他、遠足、講演会、音楽会、バザー等多彩な行事についての想い出が綿々と自由記述の欄に書き綴られている。しかし一方で戦争の終盤戦の頃の女学生の生活は緊迫した空気を伝える。兵士達の軍服の修理、農作業のための勤労働員、さらに学徒動員等は、慰問袋作りや千人針を縫ったことと共に、より一層戦争のきびしさを女学生自身が肌で感じ取る機会となっている。

「キリスト教の精神教育でしたから、外からの弾圧が厳かったようです。米國、台灣、中国、朝鮮あたりの留学生が多く、米國の二世の方は不幸だったと思います」大江高女 一九四五年卒業生

一方、この学校で、「奉安殿・校母像に礼をつくし、講堂に入り、君が代、海行かば、勤皇志士等の詩の朗詠をしてから授業に入」っている状況があるので、当時の国家支配層から白眼視されない方策を講じていたことは確かである。成城高女の生徒の中には「学内の自由さと、学外の軍国調の落差が激しいので、憲兵などに目を付けられないよう出来るだけ目立たぬよう気を付け」ている人もいた。

4 家庭学習の時間

生徒が家庭で学習する時間（表一七）は、一時間ないし二時間で、県立高女の場合よりは少ない。類型別に見ると第三類型が他の類型より平均学習時間が多い。個性のある私立校の性格を考えると、家庭学習とは何か、さらに学習とは何かという問題を提示されているともいえよう。

5 通学時間・方法

平均すると自宅通学が八四％と大半を占める（表一八）が、類型別にみると、第一、第二類型が六八、五五％と数値が低くなっている。これは、それだけ寄宿舎あるいは下宿通学が多いことになる。この傾向は県立高女と異なる点である。通学方法も徒歩通学が県立高女の六割強に比し、私立高女は二五％と低く、乗物を利用するものが六〇％となっている。これは当然、通学時間に影響を及ぼし、三〇分以上、一時間以内が四割を占める。通学範囲の広さを裏書きするものである。

表18—1 通学場所

	自宅通学		下宿通学		寄 宿 舎	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	4	80.00			1	20.00
1915年	9	75.00			4	33.33
1920年	30	71.43			9	21.43
1925年	58	73.42	5	6.33	12	15.19
1930年	73	76.04	2	2.08	11	11.46
1935年	108	94.74	1	0.88	6	5.26
1940年	105	92.92	1	0.88	4	3.54
1945年	99	86.09	3	2.61	1	0.87
合 計	486	84.38	12	2.08	48	8.33
第一類型	53	67.95	5	6.41	17	21.79
第二類型	95	54.62	1	0.84	20	16.81
第三類型	333	89.76	4	1.08	10	2.70
第四類型	5	62.5	2	25.00	1	12.50

表18—2 通学方法

	徒 歩		自 転 車		バス・電車・汽車	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	60.00			1	20.00
1915年	3	25.00			5	41.67
1920年	11	26.19			19	45.24
1925年	24	30.38			39	49.37
1930年	21	21.88			60	62.50
1935年	23	20.18			79	69.30
1940年	30	26.55			67	59.29
1945年	27	23.48	1	0.87	73	63.48
合 計	142	24.65	1	0.17	343	59.55
第一類型	15	19.23			44	56.41
第二類型	50	42.02			50	42.02
第三類型	75	20.22	1	0.27	246	66.31
第四類型	2	25.00			3	37.50

表18-3 通学時間

	30分以内		1時間以内		1時間以上	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	3	60.00	1	20.00		
1915年	4	33.33	2	16.67	1	8.33
1920年	12	28.57	14	33.33	2	4.76
1925年	29	36.71	24	30.38	7	8.86
1930年	39	40.63	33	34.38	10	10.42
1935年	40	35.09	56	49.12	4	3.51
1940年	46	40.71	52	46.02	9	7.96
1945年	42	36.52	55	47.83	8	6.96
合 計	215	37.33	237	41.15	41	7.12
第一類型	19	24.36	31	39.74	6	7.69
第二類型	68	57.14	23	19.33	6	5.04
第三類型	125	33.69	180	48.52	28	7.55
第四類型	3	37.50	3	37.50	1	12.50

表19 卒業後の進路

	進 学		就 職		家業手伝い		家事手伝い 花嫁修業		その他	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00					1	20.00		
1915年	4	33.33					7	58.33		
1920年	10	23.81	3	7.14			15	35.71	3	7.14
1925年	33	41.77	1	1.27			32	40.51	1	1.27
1930年	42	43.75	4	4.17	1	1.04	33	34.38	3	3.13
1935年	47	41.23	13	11.40			49	42.98	1	0.88
1940年	72	63.72	12	10.62			25	22.12	1	0.88
1945年	53	46.09	29	25.22			26	22.61	4	3.48
合 計	262	45.49	62	10.76	1	0.17	188	32.64	13	2.26
第一類型	36	46.15	8	10.26			20	25.64	3	3.85
第二類型	42	35.29	20	16.81			42	35.29	2	1.68
第三類型	180	48.52	33	8.89	1	0.27	124	33.42	7	1.89
第四類型	4	50.00	1	12.50			2	25.00	1	12.50

6 卒業後の進路

卒業後、進学するものが平均四五％で、県立より一割程度高い数値になっている(表一九)。しかし、より専門の学問というよりは教養を高めるためと言った方が妥当である。就職は一一％で七％ほど県立を下廻る。ただ一九四五年は就職が二五％と上昇している。女性の社会的進出と時局の反映とが相俟つてとみられる。

(三) 卒業後の生活

1 就職経験

就職経験の有無(表二〇)は、平均四二％が就職経験ありで、三九％が経験なしとなっている。一九四〇年以降、就職経験有が無の数値を上廻るが、この現象は県立高女より十年遅い。この原因を経済的に裕福な家庭が多いとみるべきか、女性の社会的進出をよしとしない風潮が強いためとみるべきか、判然としないが、双方の要因が絡んでいるものと思われる。

2 結婚

既婚、未婚の問に対し(表二一)、九五％が結婚したと答えている。「女性は結婚して、家庭を守るもの」という従来の考えのもとに「財を望まず本人を良く見極め、無から幸せを積み重ねて行くように」との恩師の教えを大事にして結婚生活を続けてきたのが大方の女性の生き方であったといえよう。その中で「日本国内での男尊女卑という差別に対して批判的な考えを持っていた」生徒もいたし、「相互の愛情と信頼のみで成立する結婚を考えていた」者もいた。一人のシスターの結婚観を引用しよう。

「結婚は大切なことと尊重しております。神が定められた神聖なことと思います。修道生活に入りましたのは決して結婚生活を軽蔑したり、その労苦から逃れるなどの理由からではなく、神の招きによるものです。」

3 子どもの数

私立高女生の兄弟数の平均は五・四人であった(①—③—②参照)が、彼女等が結婚して出産した子どもの数の平均は二・五人と大幅に減少している(表二二)。減少率は県立より高い。調査人数の少ない一〇年代は別にして年代別推移を見ると漸減状態は二〇年代で一九三五年から四〇年で急激に減少していることがわかる。戦後の食糧事情の劣悪さも影響したであろうし、また、出産・子育ての意識の変容にも原因を求めることができる。

表22 年代別
平均子供数

年代	人数	子供数
1910年	5	2.20
1915年	11	3.73
1920年	40	3.03
1925年	76	3.13
1930年	88	2.94
1935年	110	2.64
1940年	109	2.06
1945年	110	1.84
平 均	549	2.52

表20 就職経験

	有		無	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	1	20.00		
1915年	2	16.67	6	50.00
1920年	9	21.43	15	35.71
1925年	24	30.38	30	37.97
1930年	32	33.33	44	45.83
1935年	41	35.96	58	50.88
1940年	63	55.75	36	31.86
1945年	69	60.00	33	28.70
合 計	241	41.84	222	38.54
第一類型	31	39.74	28	35.90
第二類型	58	48.74	39	32.77
第三類型	147	39.62	153	41.24
第四類型	5	62.5	2	25.00

表21 結婚の有無

	結婚した		結婚しなかった	
	実数	百分率	実数	百分率
1910年	5	100.0		
1915年	11	91.67		
1920年	40	95.23	1	2.38
1925年	76	96.20	1	1.27
1930年	88	91.67	6	6.25
1935年	110	96.49	2	1.75
1940年	109	96.46	3	2.65
1945年	110	95.65	6	5.22
合 計	549	95.31	19	3.30
第一類型	73	93.59	6	7.69
第二類型	115	96.64	3	2.52
第三類型	353	95.15	10	2.70
第四類型	8	100.00		

4 夫の職業

夫の職業(表二三)を親の職業と比較してみると、農・林・漁業の第一次産業が一四・四%から〇・四%へ、自営商業の一四%から六%への減少、逆に会社員・銀行員といったいわゆるサラリーマンの二四%から四一%への増加となっている。この現象は県立高女の場合より顕著である。これが何に起因するか即断はできない。しかし、国勢調査における職業分布からみると、かなりの隔りがあることから、私立高女生の家庭がある程度めぐまれた階層に属していることを証左するといえよう。

四、まとめにかえて

私立高等女学校および女学校の卒業生に対するアンケートを集計した時点での第一印象は、学校毎に個性的な教育をしていた事実である。創立当初、全寮制をとっていた学校、校費生と称して奨学金を出していた学校、芸術教育を大事にする学校、スポーツに重点を置く学校、宗教々育を教育の根幹にしている学校等、それぞれに学校創設時の創立者の教育に対する理念のあらわれである。

一方、各学校とも女子中等教育の任を果す中で共通する問題も当然派生してくるし、学園に学ぶ女学生の心性についての共通の問題もある。このように考えると戦前の女子中等教育の独自な問題と普遍的な問題を明らかにする必要がある。これはまた、公立校と私立校の独自性と普遍性の問題でもある。

最後に、これらの学校教育が女学生にどのような影響を与えたかを彼女等の記述を捉えながら考えてみよう。

「在学中の良い教育と、当時の校長の高い人格の許に指導を受けた恩恵を感謝しております。在学中家庭のレベルがある程度揃っておりましたから、社会の裏表を知らず、社会勉強は不十分であったと思っております」雙葉高女 一九二〇年卒業生

保守的でお嬢様学校であったとの評価は多くの卒業生が感じている。そのかわりガリガリした所がなく、豊かな気持を植えつけられ母校に対しての感謝の念が記述されている。

「読書と懇談を通じて、人間として何が大切な、神を対象として生きること学んだことが一番大きなことであつたと思う。詰め込みとの戦い。世俗との戦い。一つ一つの学問はばらばらでなく、総合的に生きた学問の大切さを学んだ」自由学園 一九三〇年卒業

積極的評価と共に、歴史・地理などの系統的勉強不足も指摘する。他校より学力が低いのではないかとの疑念もこのあたりからのもの

表23 夫の職業（年次別）

職業分類	1910		1915		1920		1925		1930		1935		1940		1945	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警 察							1	1.4					1	1.0	1	1.0
裁 判 所							1	1.4					1	1.0		
軍 人	1	25.0	2	16.7	1	2.6	3	4.1	3	3.6	8	7.5	6	5.9		
官 吏					6	15.4	8	10.8	9	10.7	10	9.3	17	16.7	11	10.7
市町村長・議員等			1	8.3							1	0.9				
地 主							1	1.4								
大企業経営者					1	2.6			47	4.8	4	3.7	4	3.9	4	3.9
中小企業経営者					1	2.6	1	1.4	3	3.6	3	2.8	1	1.0	2	1.9
恩給・金利生活者													1	1.0		
農・林・漁業													1	1.0	1	1.0
自営商業			1	8.3	5	12.8	2	2.7	5	6.0	11	10.3	4	3.9	4	3.9
自営工業・製造業					2	5.1	4	5.4			3	2.8	3	2.9	1	1.0
医療関係者					3	7.7	5	6.8	6	7.1	10	9.3	6	5.9	7	6.8
教 員	1	25.0	1	8.3	5	12.8	13	17.6	15	17.9	11	10.3	9	8.8	10	9.7
神職・住職					1	2.6			2	2.4	1	0.9				
技 術 者			2	16.7			3	4.1	7	8.3	2	1.9	2	2.0	5	4.9
会社員・銀行員	2	50.0	5	41.7	13	33.3	28	37.8	27	32.1	41	38.3	44	43.1	54	52.4
自 由 業					1	2.6	4	5.4	3	3.6	2	1.9	2	2.0	3	2.9
工場労働者																
計	4	100.0	12	100.0	39	100.0	74	100.0	84	100.0	107	100.0	102	100.0	103	100.0

表23-2 夫の職業（類型別）

職業分類	第1類型		第2類型		第3類型		第4類型		合 計	
	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
警 察	1	1.5	2	1.8					3	0.6
裁 判 所					2	0.6			2	0.4
軍 人	4	6.1	4	3.7	16	4.7			24	4.6
官 吏	10	15.2	16	14.7	33	9.6	2	28.6	61	11.6
市町村長・議員等					2	0.6			2	0.4
地 主					1	0.3			1	0.2
大企業経営者	2	3.0	5	4.6	10	2.9			17	3.2
中小企業経営者	2	3.0	3	2.8	6	1.7			11	2.1
恩給・金利生活者			1	0.9					1	0.2
農・林・漁業	1	1.5			1	0.3			2	0.4
自営商業			3	2.8	29	8.5			32	6.1
自営工業・製造業	2	3.0	3	2.8	8	2.3			13	2.5
医療関係者	3	4.5	8	7.3	26	7.6			37	7.0
教 員	9	13.6	17	15.6	37	10.8	2	28.6	65	12.4
神職・住職	1	1.5			3	0.9			4	0.8
技 術 者	1	1.5	3	2.8	16	4.7	1	14.3	21	4.0
会社員・銀行員	29	43.9	38	34.9	145	42.3	2	28.6	214	40.8
自 由 業	1	1.5	6	5.5	8	2.3			15	2.9
工場労働者										
計	66	100.0	109	100.0	343	100.0	7	100.0	525	100.0

のであろう。「すべて毎日の学校生活の中での問題をとらえての実物教育」という羽仁の教育理念が息づいている。

「この学校には一貫した学校魂があり、淑徳魂と呼んでいます。いつもこれに照らし、自分の事は最終的に自分で判断するという尊い力をつけてくれました」愛知淑徳高女 一九三〇年卒業生

主体的な自己判断を積極的に促がす教育に重点がおかれていたと思われる。それに対し、

「愛と誠実に忠実なれ、との点は良いと思いますが、悪かった点は女性是自己主張とか、発言を慎むべきものだとの風潮になじみ過ぎましたので主体性に欠けていました」跡見高女 一九三五年卒業生

「良妻賢母を育て上げるのが、我が校の目的でしたので、私はそれなりに良かったと思っています。……内助の功の方に重点がかけられていたため、自立の点は欠けていると思います」三輪田高女 一九四五年卒業生
と、率直に当時の教育に対する批判もなされている。

「戦後の価値観の転換期には、女学校で受けた良妻賢母・国粹主義に反発して、恨めしく思ったこともあるが、よく考えれば国家の教育方針で仕方のなかったことでもあった。教育の恐ろしさを身にしみて思う」実践高女 一九四〇年卒業生
再びそのような事態をもたらさないよう、今日の我々に課せられている任務である。

「物事を相対的に捉え、ゆとりをもつてみる。自分の個性を保ちながら他と協調する。他人が競争相手ではなく仲間として考えられる。どんな時でも楽しむことが出来る。等々言葉でなく、学園の生活を通じて学んだ」成城高女 一九四五年卒業生
戦争が激化する時期の生徒の記述である。

「日毎に激しくなる戦況と世情(思想の弾圧、統制、言論の圧迫)の中で、先生方が必死で正常な学生生活を送らせるべく学生を守って下さったことが、楽しい思いでの中に、はつきりと感謝をもって記憶される」と述べる生徒の幸せを思う。それと共に、本来、学校ゆえに果し、遂行すべきつとめ、時には行政と相容れぬ思想のため対峙することも辞さない毅然とした姿勢に教えられるものがある。私学の独自性はあくまでも堅持することが望まれる。

註

- (1) 山本禮子・福田須美子「高等女学校の研究（第二報）——高女卒業生のアンケート調査から——」『和洋女子大学紀要』第二七集（文系編）所収 一九八七年三月発行
- (2) 県立高等女学校、私立高等女学校および女学校に対するアンケート調査の結果は『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料』として三分冊の冊子にまとめた。

付 記

本アンケート調査は、昭和六一年度ならびに昭和六二年度の「特色ある教育研究」として、和洋女子大学（山本禮子）が、日本私学振興財団の特別補助金を得て、実施したものである。謝意を表するとともに、アンケートに答えて下さった方々及び、関係学校同窓会にお礼申し上げる。

なお、本研究は高等女学校研究会プロジェクトチームの研究の一部である。

（本学教授）